

〔論文〕

ソーシャルサポートとしてのピアサポートに関する一考察

——育児マイノリティの実践から社会的包摂を展望する——

越 智 祐 子

名古屋学院大学経済学部

要 旨

共通の悩みや痛みをもつ人たちが支えあうピアサポートはこれまで、一定の成果を上げてきた。しかし多胎育児者は数が少なくそのつながりは広域になりがちである。そこで、身近な地域子育て支援拠点等へ安心して親子が出かけられるよう、スタッフや保健師への啓発研修がスタートした。この試みは、受講者には好評を得ているが、ピアサポートとの接続、地域社会一般との接続という点では、直接的な効果につながらない。

そこで本稿で、多胎育児領域におけるピアサポートについて、実践報告をもとに、ソーシャルサポートの機能という点から改めて評価し、地域社会と接続する際の課題を考察した。

結果、多胎育児支援領域で現在おこなわれているピアサポートは、情緒的サポートの提供が特徴で、多胎育児家庭の孤立を防止し、育児負担感や不安の軽減に有効であることを確認した。一方で、現行のサポートメニューは、多胎育児者たちを地域社会へ接続する機能を持たないため、新たな方法を提案する。

A Study on Functions of Peer Support System as Social Supports for Minority of Childcare

Yuko OCHI

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

発行日 2016年3月31日

1. はじめに

一度にふたり以上の子どもたちを育てる多胎育児者は、育児マイノリティである。2013年の多胎出産率（多胎の母の数を全出産および死産数で除したもの）は、9.95%である（大木秀一2015）。人口動態統計によれば、2013年の多胎での出生数は20006人で、これは年間出生数のおよそ1.9%にあたる。子どもが50人いたら、そのうちひとりはふたごだという計算だ。一学年に一組のふたごがいるかいらないか、という程度のめずらしさだと考えてよい。

自然状態では、日本人は人種的に多胎出産の数は多くないとされるが、近年は、高齢出産の影響や生殖医療の普及にともなって、多胎出産は増加してきた（大木2015）。増加しているのは二卵性双生児であり、きょうだい程度に似ている（逆の言い方をすれば、きょうだい程度にしか似ていない）ふたごである。今後は、日本産科婦人科学会のガイドラインの変更にしたがって、多胎出産は現状程度の比率で推移することが見込まれる。つまり多胎育児者、ふたごやみつごとといった人々は、これからの日本社会で、一定数存在する人々となる。100人母親がいたらそのうちの1人は多胎児の母であり、50人子どもがいたら、そのうちのひとりはきっとふたごである。このようにみると、さほど少数ではないかもしれない。しかしながら、自分たちの事情をほぼ考慮されないという点で、多胎育児は依然として社会的にマイノリティである。

多胎育児者の悩みは、単胎育児者たちとの微妙な差異の積み重ねと、そのことが一般社会から理解されていない現実の中に存在する（越智・横田2011）。一見すると、同じ月年齢の子どもが複数いるだけの違いに思える。もちろん、物理的な量の違いは負担の違いに直結するが、より詳細に妊娠・出産・育児の体験を聞き取ってみると、さまざまな違いがあることに気づかされる。

端的に言って、多胎妊娠・出産・育児は、単胎よりも過酷である。例えば、多胎妊娠が判明したとき、担当医は医学的なリスクの高さについて説明をおこなう。産院が多胎を扱っていないければ、転医が必要となる。産科医療は地域格差が大きく、地域によってはかなり遠方への転医を余儀なくされる。また、妊娠後期には、早産を防止するため、ときに数ヶ月に及ぶ管理入院が必要となるケースも多い。絶対安静を要請されるが、「一切動いてはいけない自分のつらさよりも、なんとしても赤ちゃんを守らなければという思いが先にたつ¹⁾」と当事者は語る。このことは、過酷な現実を表している一方で、多胎育児者にとってはありふれた体験である。出産後は、新生児の両方ないしは片方がGCUやNICUに入ることが多く、毎日搾乳して病院に通いつつ、自宅にいる子の世話もする、という二重生活を送ることになる。ふたりが同じような発達過程をたどるとは限らず、不安も高い。自宅での生活も、同時授乳のテクニックが必要だったり、同時のお風呂に困ったり、技術的な難易度が高い。さらには、ふたごだからといって同時に行動してくれるわけではないので、交互に寝かしつけや授乳をおこなううち、まとまった睡眠がとれずどちらにどう対応したか混乱するなど、ふとんで寝た記憶がない、産後1年くらいまでは思い出したくない、という人もいる。

以上のような多胎妊娠や多胎育児の苦労は、一般には想像されない。むしろ一般に流通しているふたごイメージはステレオタイプであって、否定的なものであれば、現代でも一部の地域に根

強く残る産育習俗に見られるような偏見に基づく差別感情や忌避であり、好意的なものであれば、そっくりでかわいい、子育てが一度に済むから楽でいい、という励ましである。悪意はわかりやすくぶつけられるが、好意的なものは、以心伝心で仲がよい、ふたりそっくりなのがかわいらしい、というペア前提の目線であって、それ以外の現実を想像しないだけなので、結果的に育児者に対する不適切な発言を悪意なくおこなうこととなる。学齢期のふたご自身に対しても、ふたりを比較するような発言をして本人たちを困惑させたり、ふたりをひとつのセットとして扱い、それぞれの個性を十分に尊重できなかったり、という人権侵害を悪意なくおこなってしまう。悪意のないことは、言われる方にもわかるので異議申し立てもしづらく、無力感を覚える多胎育児者は少なくない。

このような、周囲からの無理解や偏見が引き起こす生きづらさは、マイノリティが共通して抱える困難である。この生きづらさを緩和するために多胎育児者たちがとってきた対策は、仲間同士で相互に助け合う「ピアサポート」である。

多胎育児者たちのピアサポートはこれまで、一定の成果を上げてきた。次のステップとして、近年は、非多胎育児関係者に対する、多胎育児当事者からの理解を求める呼びかけがみられる。多胎育児者はマイノリティなので、ピアに限ったつながりは広域になりがちだ。身近な地域で安心して集まることができる場所を増やすため、まずは地域の子育て支援拠点のスタッフや、多胎育児者と関わる可能性の高い職種である保健師や助産師への啓発をおこなっているのである。この試みは、受講者には好評を得ているが、ピアサポートとの接続、地域社会一般との接続という点では、直接的な効果につながるものではない。

そこで本稿では、多胎育児領域におけるピアサポートについて、「NPO法人ぎふ多胎ネット（以下、ぎふ多胎ネット）」の実践をもとに、ソーシャルサポートの機能という点から改めて評価し、地域社会と接続する際の課題を考察する。このことを通じて、育児マイノリティが、地域社会に包摂されるための方法を模索したい。

2. 研究の背景

2.1 子育て支援施策の展開

日本の子育て支援策は、1990年の「1.57ショック」以降加速した。その概要は「要保護児童対策から一般児童の健全育成へ」「児童福祉から子ども家庭福祉へ」「施設から地域へ」という流れとして整理できる。

特に、2007年から地域子育て支援拠点事業が従前の事業を再編してスタートし、児童館やひろば等の地域における親子が集まる拠点を、中学校区にひとつ程度といった、身近な地域に設置することが全国的に進められた。さらに、2008年に改訂された「保育所保育指針」では、保育所保育士の業務として、保護者支援が明記されている。

これらに加えて、2015年度からは、利用者の特性を理解したうえで、制度やサービスをコーディネートする機能が強調され、新たに「利用者支援事業」としてスタートした。この機能は、地域

子育て支援拠点がすでに一部で担っていた機能であるが、より明確に位置づけられることになった。親子が気軽に相談に出かけられる場所、例えば子育て支援センターのようなところで、利用者の相談に応じ、サービス調整や開発をおこなうこととなっており、妊婦も支援対象に含まれている。この変化は、妊娠期からの包括的なニーズの把握ときめ細やかなサービスの提供を小地域単位で目指したものだと考えられる。現代日本における子育ては私事であるだけでなく社会的な関心事でもあり、地域での支援が求められているのである。

利用者支援事業の中で注目すべきものに、「母子保健型」がある。これは、「子育て世代包括支援センター」というワンストップとして整備が始められているもので、妊娠期から子育て期にわたるまでのさまざまなニーズに対して総合的相談支援を提供することになっている。「子育て世代包括支援センター」は、「日本型ネウボラ」とも呼ばれているが、「ネウボラ」とは、「アドバイスの場所」という意味の、フィンランドの子育て支援策で、地域における相談の拠点を指す語である。ネウボラの特徴は、高橋睦子によって①普遍性の原則（全ての妊婦・母子・子育て家族が対象）、②動機付けの工夫・社会からの祝福（育児パッケージ）、③利用者中心の「切れ目ない子育て支援」、④リスクの早期発見・早期支援、⑤ネウボラ保健師（専門職）と後方支援チーム・他職種連携、⑥手厚い産後ケア、⑦母子支援から子育て家族全体をつつむ「切れ目ない支援」、⑧現場のための全国共通の指針の開発、と紹介されている（高橋2013）。

このように、利用者支援事業には、子育て家庭の個別ニーズの把握が含まれており、理念的には、子育て中の家庭の多様性への配慮がなされていると言ってよい。とはいえ、子育て支援の領域ではとても興味深いことが起こっている。子育てを私事ではなく、社会的な課題としてとらえ直す潮流は、法制度の歩みから明らかである。一方で、家庭を持ったり子どもを育てたりすることは、圧倒的多数の人たちがおこなう当たり前のことだと見なされている。このため、多数派である支援者が、自らの経験が無自覚に参照する場合も少なくない²⁾。現実においては、必ずしも多胎や発達障害等の育児マイノリティを考慮した形でのサービス提供にはなっていないと考えられる。マイノリティのニーズは、現在も理想ほどにはあまり周囲に気づかわれていない。

つまり、一般的には「子育ての課題は社会的な課題なので、地域社会で支援しよう」というコンセンサスが形成されつつある一方で、より支援が必要だと考えられる育児マイノリティの課題の共有は不十分なのである。

2.2 見えにくい生きづらさ

育児マイノリティのニーズが気づかれにくい理由としては、先に述べたように、子育てとは、誰もが当たり前に取り組むライフイベントで、通時代的におこなわれてきたいわば「本能」でおこなわれるものだという暗黙の前提が指摘できる。さらに、多胎を含め、いくつかのマイノリティには、少数派であることが一見しただけではわかりづらい、という特徴がある。これは、秋風千恵（2008）で「インペアメントにおいて可視的でない」と表現されていることだ。例えば、視覚障害者の一部の人たち、全ろうや全盲なのではないが、矯正してもなお見えづらくきこえづらいといういわゆる軽度障害者が該当する。このような人たちは、障害を持っていることに気づか

れにくく、支援が必要な場面にあって、適切な対応を得られにくい。よく見える/きこえるか、まったく見えない/きこえない、のどちらかは想像しやすいのだが、その中間的な存在は気づかれにくいのだ。徐々に視力が低下した障害学研究者の倉本智明(2006)は、駅で「運賃表を自分に替わって読んでほしい」と依頼したときに、弱視時代は視覚障害者であることがわかりづらいため協力が得にくく、全盲となり白杖を持つと、協力は得られやすくなる現実を紹介している。インペアメントで決定する障害等級は、全盲のほうが重度の認定となるが、社会生活上の困難は軽度障害の場合に大きいケースもある、という例である。多胎児を育てる上で、育児者が感じる困惑は、この「インペアメントにおいて可視的でない」人々の感じる困惑と構造的に類似している。ここには、周囲の無理解による日々の細かな生きづらさが存在する。育児者は忙しく、自分たちの置かれている状況について、周囲の理解を求めて説明するだけの余裕を持たない場合が多い。このため、多胎育児者たちは説明なしで共感してもらえる可能性の高い「ピアサポート」を発展させてきたのである。

2.3 ソーシャルサポートとピアサポート

ここで、ソーシャルサポートとピアサポートについて簡単に確認しておきたい。ソーシャルサポートの定義は研究者によって様々だが、ここでは「人に、自分はケアされ、愛され、敬意を払われる存在であり、相互に責務のある紐帯の一員だと信じさせる情報」(Cobb 1976)を用いる。この定義によれば、ソーシャルサポートは、自分は社会の網の目の中に存在していて孤独な存在ではないことを実感させるような情報のことなので、必ず社会関係を伴う。定義では「情報」だが、単にことばだけでなく、「ケアされている」ことが伝わるような物質的な支援を含む概念である。

Cohen らによれば、ソーシャルサポートはその機能から、情緒的サポート・道具的サポート・情動的サポート・コンパニオンシップの4種類に分類され、具体的な内容は表1のとおりである(Cohen et al., 2000 = 小杉他訳2005)。

表1 ソーシャルサポートの機能的分類

名称	内容例
情緒的サポート	共感的に話を聞く・情緒的援助と受容の提供
情動的サポート	問題解決に有効な知識の提供・地域の資源やサービスについての情報の提供
道具的サポート	世話の手伝い・一緒に動く・金銭を貸す
コンパニオンシップ	社会的活動や娯楽と一緒に参加できる関係

(出所：Cohen et al., 2000 = 小杉他訳2005より作成)

次に、ピアサポートについてみると、ピアサポートとはなかまによる支援のことであり、「同じ問題を抱えた人たちが自分たちにお互いに助け合う」ことを意味する(石原2013)。また、ピアサポートの研究動向の整理をおこなった大石由起子他は、西山久子・山本力(2002)の「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称」を紹介している(大石他)。ソーシャルサポート

では、社会関係の種類を問わないが、ピアサポートはおなじような経験や立場をもつなかまに限定した関係であることから、ピアサポートはソーシャルサポートに包含される概念だとみなされる。そこで次章以降では、ぎふ多胎ネットが取り組む「多胎版ネウボラ」の内容について、ソーシャルサポートの機能的分類から考察する。

3. んふ多胎ネットの取り組み

3.1 多胎版ネウボラ

ぎふ多胎ネット（2015）が作成した報告書『「妊娠期からのふたごちゃん・みつごちゃん育児応援事業」報告書』から、その取り組みを紹介し、検討する。

ぎふ多胎ネットは、2006年から任意団体として活動を開始し、2012年にNPO法人格を取得した、多胎育児当事者を中心メンバーとした団体である。岐阜県で活動してて、全国組織である日本多胎支援協会の会員でもある。ぎふ多胎ネットは、2006年の活動開始当初から、妊娠期からの切れ目のない支援を目指して、支援メニューを充実させてきた。そのあり方を「多胎版ネウボラ」と呼んでいる。その特徴は、7項目に整理されていて本家ネウボラを紹介する高橋（2013）の整理を踏まえたものになっている。具体的には、①普遍性の原則、②動機づけの工夫、地域からの祝福、③当事者中心の切れ目のない支援、④リスクの早期発見・早期介入・早期支援、⑤多職種との連携、⑥当事者をエンパワメントする支援、⑦支援を支える人材の育成、である（ぎふ多胎ネット2015）。共通点は、妊娠期からの切れ目のない支援を指向している点であり、相違点は、フィンランドのネウボラや現在整備されつつある日本版ネウボラが、母子保健および福祉の専門職モデルであるのに対して、ぎふ多胎ネットが展開している多胎版ネウボラは、当事者モデルを採っていることである。多胎版ネウボラは、基本的にピアサポートなのだ。

具体的なメニューは、図1に示すとおり6つである。

図1に示す6つの支援のうち、対象が集団というよりは個人であるもの（たとえばピアサポート訪問）では、相談を担当する人はピア＝多胎育児経験者であればそれで事足りるとは考えられておらず、「ピアサポーター養成講座」が用意されている。サポートしたいと考える人たちはまず、ピアサポーターに必要な技術や知識を学び、支える側がひとりで抱えこんでしまうことのないように、チームで対応することになっている。ピアサポーターとして活躍を始めた人には「フォローアップ講座」も用意されていて、支える人材を育成し、支える仕組みができていてる。

3.2 ソーシャルサポートとしての多胎版ネウボラ

ここでは、ぎふ多胎ネットが実施している6つの支援メニューについて、ソーシャルサポートの機能的分類を用いて検討したい。

まず、「多胎プレパママ教室」であるが、このプログラム内容は医療保健の専門家による知識の提供と、多胎の先輩パパママとの交流会である。この機会に、経産婦が単胎と多胎の妊娠出産経過の相違を知ることと少なくない。知識提供は、専門職からの講義という形でおこなわれて

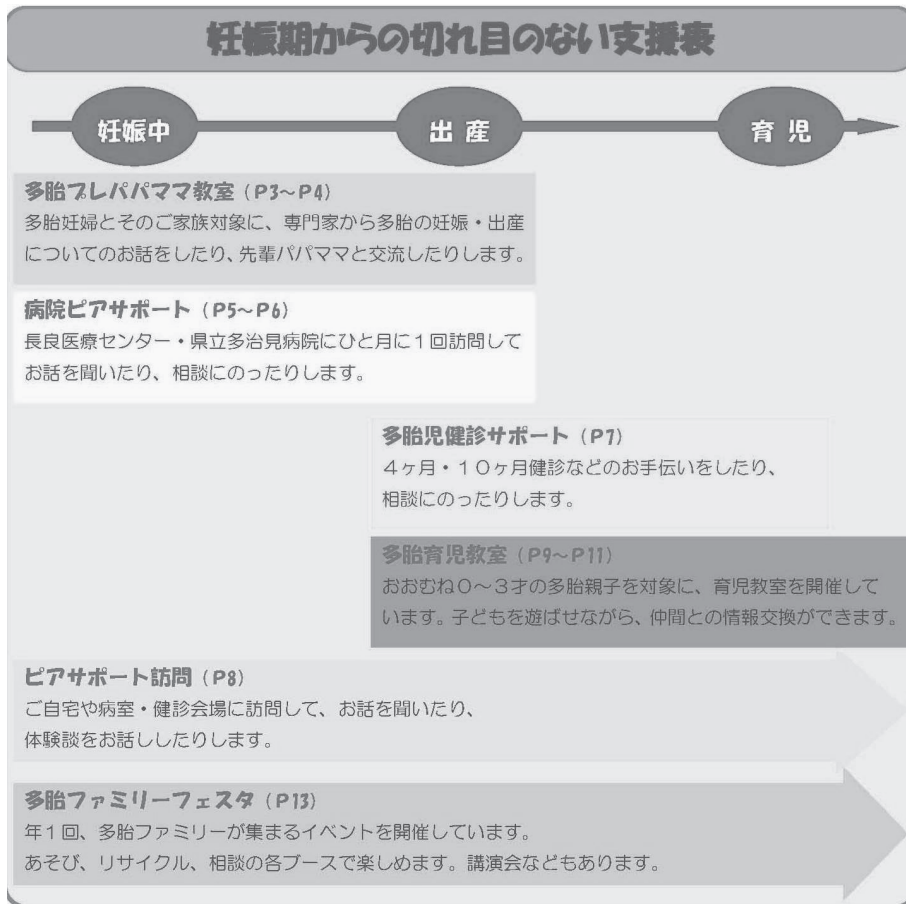


図1 ギブ多胎ネットの支援メニュー

出所：『「妊娠期からのふたごちゃん・みつごちゃん育児応援事業」報告書』

いるものの、その機会はピアによって設けられていることから、間接的にピアによる情報提供がおこなわれていると考えられる。また、多胎育児経験者との交流会では、情動的サポートとして、専門職には聞きづらいような日常生活上の疑問や家族関係に関すること等に関する知識や情報の提供がおこなわれている。同時に、自分はひとりではない、なかまがいるという感覚を持たせる情動的サポートもおこなわれている。妊娠期は、多胎妊娠・出産・育児についてのイメージをまだ持っていない人が多く、共感よりも、リスク管理や課題解決に適切なイメージ形成に重きが置かれている。

続く「病院ピアサポート」では、ピアサポーターが病院へ出向き、入院中、通院中の妊婦や家族の相談に応じ、ピアサポーターの体験談を語る、といった内容の活動がおこなわれている。妊娠期の生活上の課題や不安について、情動的サポートと情動的サポートがおこなわれている。病院でのサポートを提供するためには、病院の理解と協力が不可欠であり、全国でも先進的な取り組みとなっている。

「多胎児健診サポート」では、4ヶ月健診と10ヶ月健診にあたって、会場へピアサポーターが出かけていき、必要に応じて着替えや移動を手伝う。これは道具的サポートである。同時に、健診サポートは、同じように多胎児を育ててきた先輩との出会いの場となっており、ここでも情緒的サポートと情動的サポートが提供されている。健診時は、「比較」がキーワードとなってしまう、多胎育児者の不安が高くなる。ふたりを比較したり、周囲の単胎児と比較したりして、緊張が高くなってしまふのだが、そんなときに傾聴訓練を受けたピアサポーターがそばにいることは、不安や緊張を緩和する。とくに重要なのは、多胎ネットの活動を紹介し、集まる場所や相談できる先があることを知ってもらうことで、その場だけの関わりに終わらせず、なかまをみつけてもらうきっかけを提供していることである。

「ピアサポート訪問」「多胎育児教室」でも、他のメニュー同様に、情緒的サポートと情動的サポートが提供されている。また、子どもと遊びながら話を聞いたりすることで、心理的にも物理的にも母子の密着度が低くなることは、レスパイトケアという道具的サポートとしての側面ももっている。特に「ピアサポート訪問」は、多胎児を連れた外出は容易ではないことから、拠点まで出向くことが難しい人や集団になじむことが不得手な人への接近法として、非常に意義がある。産後うつ等の専門職への連携が必要なケースでは、必要に応じて、ケース紹介がおこなわれている。

表2 ソーシャルサポートの機能による整理

名称	多胎プレパ ママ教室	病院ピア サポート	多胎児健診 サポート	ピアサポート 訪問	多胎育児教室	多胎ファミリー フェスタ
情緒的 サポート	・なかまが いる、ひと りじゃない	・先輩の話に気持ち が楽になった ・長期入院に落ち こんでいたが同じ 境遇の人と話せて 気持ちが少し楽に なった ・同じ週数くらい のママと話せて楽 しかった	・ふたりとも泣いて ばかりで困ったが助 けてもらえてうれし かった ・ふたごのことを話 す機会がなかなか ないのでいろいろ話を きいてもらい楽し かった	・明日からまた がんばれそう	・わたしのよう な状況はひとり だけではないと 知れて励みにな りました ・同士と思える 人たちと話せて 心強かった	・単胎と比べてし まっていたが、こ れでいいんだ、と 思えた
情動的 サポート	・単胎との 差がこんな にあるとは 知らなかつ た	・神経質になら ず、周囲に助け てもらうことが大事 だとわかった ・産後の記録方法 を教えてもらった	・二人とも違う人間 なので、違って当た り前ということばが 印象に残った ・授乳に悩んでいた ので話が聞けて助 かった	・地域のことを 教えてもらえて ありがたかった ・情報を得て心 構えができた	・具体的な育児 方法を学べた	・まわりにはない のでなかなか相談 できなかったが、 先輩ふたごママに 話を聞けた ・専門家による成 長発達等の相談
道具的 サポート			・着替えを手伝う ・ずっとつきそって 移動を手伝う	・少し休憩でき ました	・気分転換に なった	・リサイクル ・ママ対象ワンコ インエステ
コンパニ オンシッ プ						・親子遊び、パバ トーク、ファミ リーフェスタイベ ントに参加

出所：『妊娠期からのふたごちゃん・みつごちゃん育児応援事業』報告書より作成

そして最後に「多胎ファミリーフェスタ」では、多様なプログラムが実施されている。親子遊び、ピアおよび専門家による相談ブースの設置、リサイクル、パパトーク会等である。相談では、情動的サポート、平行して情緒的サポートが提供されている。親子遊びならびに、イベント全体は、コンパニオンシップだと解釈できる。そして、リサイクルはお互いに不要となった服やおもちゃなどを交換しあうことによる道具的サポートとなっている。

以上の内容は、報告書に記載されている内容を用いて、表2として整理できる。ぎふ多胎ネットが展開している多胎版ネウボラは、情緒的サポートならびに情動的サポートを基礎とした、ソーシャルサポートの機能をすべて有する支援メニューであると評価できる。とくに、ピアサポートであるところから、すべてのサポートは情緒的サポートの側面を持っているのが特徴だと考えられる。このことは、ピア集団の凝集性を高める働きをする一方で、「非ピア」「非多胎育児者」とのつながりの希薄化を招きかねないことに注意する必要がある。

3.3 地域社会との接続における課題

ここまで、ぎふ多胎ネットの実践から、多胎育児支援領域において、ピアサポートが果たしている役割について、ソーシャルサポートの機能的分類にしたがって整理することで検討してきた。複数の支援メニューを用意することで、繰り返し参加できるようにして、多胎育児者および多胎育児家庭を孤立させずに「ケアされ、愛され、敬意を払われる存在であり、相互に責務のある紐帯の一員だと信じさせる」ことに成功している。このことは、多胎育児者たちが育児負担感や不安を少しでも軽くし、安心して子育てをするために、どうしても必要な条件であることは当然である。しかしそれだけでは十分でない。ピアサポートが提供できるのは、原則的には「ピアという紐帯」であって、紐帯の成立には結果として「非ピアの排除」が伴う。「ふたごならでは」という表現は、このことを端的に表している。言わなくてもわかる関係を強めれば強めるほど、言わなければわからない相手との関係構築は困難となる。現行のピアサポートが保持している、理解を求める必要のある相手との地域社会との接続点は、専門職との連携である。支援メニューに組み込まれている専門職による相談や、必要に応じたリエゾンを通じて、専門職という非ピアとつながることは可能である。しかしこれをもって、多胎育児者というマイノリティは、地域社会に包摂されている、と見なすことは適切ではないだろう。

そこで近年、日本多胎支援協会は、地域子育て支援拠点スタッフや保健師等を対象とした、多胎育児支援研修に取り組んでいる。取り組みの評価はここでは論じないが、受講者の満足度は決して低くない。しかしこの取り組みは、やはり専門職とのつながりを生むもので、しかも研修という限定された場での知識提供である。地域社会に住む非多胎育児者や育児マジョリティとの、日常的な経験として、多胎育児者との交流を提供できるものではない。ここに、地域社会との接続という観点における課題が存在する。多胎という育児マイノリティへの理解や協力を地域で促進するには、まだ別の工夫が必要だと考える。

4. おわりに

育児マイノリティとしての多胎育児者に対する支援は、現在ピアサポートが主流であって、多胎育児者および多胎育児家庭の孤立を防止し、育児負担感や不安の軽減に有効であることを確認してきた。一方で、現行のピアサポートだけでは、多胎育児者たちの地域社会への包摂を促進することは容易ではない。ピアサポートによる安心を堅固な寄り添いとしながら、マイノリティが地域社会に包摂されるためには、どのような方法があるのだろうか。ここでは、育児マイノリティが地域社会と接続するための方法について、2点提案をおこなう。

ひとつめの方法は、ピアサポートに非ピアを活用することである。具体的には、現行のピアサポートメニューを活用して、異なる世代や属性との接続を試みる。たとえば現在、多胎育児教室で子どもの見守りを、多胎育児のピアサポーターが担当しているならば、担当者に多胎育児経験のない祖父母世代や学生を混ぜてみてはどうか。これまで、言わなくてもわかってもらっていたことを、ひとつひとつ説明しなければならないという手間は増えるが、ふたごのいる暮らしを体験的に知ってもらうことができる。

ふたつめの方法は、ピアを多胎ではなく、共通の地域課題に取り組むなかまに読み替えるというものである。具体的には、子育てという個人的な課題に加えて、もうひとつ別の地域課題をテーマとしたつながりを編み出していく。この場合の課題は、災害のような地域社会全体に共通する課題が適当だと考える。たとえば、地域の育児者を対象とした、減災ワークショップの開催はどうか。子連れでの災害対応は容易ではない。妊娠婦や乳幼児は災害時要配慮者のカテゴリに入るものの、実際には「親が子どもの面倒を見るのは当然」と見なされがちである。このため、行政も育児当事者たちも、特別な対応を想定していない。現実には、大人だけで対応するのは異なる配慮が必要になるため、減災の取り組みが必要である。この取り組みを、育児マジョリティとマイノリティと一緒に検討していく。共同作業の中で、相互理解が進むのではないだろうか。

ひとつめの方法について、ぎふ多胎ネットをはじめとしたいくつかの団体で、試行が始まっている。ふたつめに関しては、現在、子育て期の家族を対象とした減災ワークショップは定型化されていないため、まずはそこから検討する必要がある。今後の研究課題としたい。

注

- 1) このことは、多くの多胎出産者が経験されていることだと考えられるが、ここでは、越智祐子と多胎育児支援グループcherrypeerの共同制作による啓発DVD「知ってほしいふたごの子育て～ふたごと過ごすホントの日常～」インタビュー部分を参照した。
- 2) 子育て支援者には、自らの経験を利用することが期待されている側面は否定できない。たとえば、サービス従事者はほとんどが女性である。多くの自治体で実施されている、ファミリーサポートサービスでは、サービス提供会員の要件に「子育て経験」を挙げる自治体も多い。

文献

- 秋風千恵, 2008, 「軽度障害者の意味世界」『ソシオロジ』52(3): 53-69.
- Cobb, Sidney, 1976, *Social Support as a Moderator of Life Stress*, Psychosomatic Medicine, 38: 300-314.
- Cohen, Sheldon et al. 2000, *Social support measurement and intervention: a guide for health and social scientists*, (= 2005, 小杉正太郎他監訳, 『ソーシャルサポートの測定と介入』川島書店.)
- 石原孝二, 2013, 「当事者研究とは何か—その理念と展開」石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院.
- 倉本智明, 2006, 『だれかふつうを教えてください!』理論社.
- ぎふ多胎ネット, 2015, 『『妊娠期からのふたごちゃん・みつごちゃん育児応援事業』報告書』(<https://drive.google.com/file/d/0BxaQHwCakmAkVG1aUjd5amJuakU/view>) 2016年1月15日閲覧.
- 越智祐子・横田恵子, 2011, 「多胎育児の社会的困難: 母親へのインタビュー調査から」『神戸女学院大学論集』58(2), 65-78.
- 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努, 2007, 「ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望」『山口県立大学社会福祉学部紀要』13: 107-121.
- 大木秀一, 2015, 「多胎育児支援に役立つ図と表」(<https://drive.google.com/file/d/0B2W1VNsbS3AXaUJyS29WX1ZENW8/view?usp=sharing>) 2016年1月15日閲覧.
- 高橋睦子, 2014, 「フィンランドの出産・子どもネウボラ(子ども家族のための切れ目ない支援)」少子化危機突破タスクフォース(第2期・第6回)資料(http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/meeting/taskforce_2nd/k_6/pdf/s3-1.pdf) 2016年1月15日閲覧.